

日本人口の歴史の変遷と対応

荒野 喆也

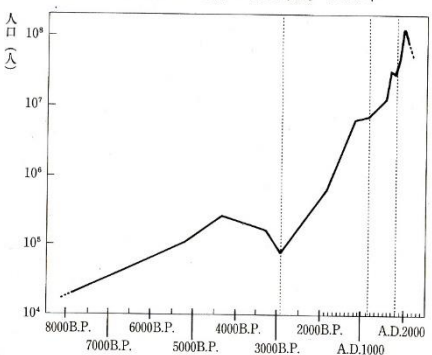
日本列島の人口は、過去一万年間に四回の成長と停滞を繰り返しながら波動的に増加してきた。人口変動の第一の波は、縄文システムの展開とともに生じた。この時代の生活様式は狩猟、漁撈、採取を基調とするもので人口分布も人口移動も、自然の環境の影響を強く受けた。人口は、縄文中期で二六万人程度であった。

第二の波は、弥生時代以降の人口増加は水稻農耕を基盤とする水稻農耕化システムの展開により支えられた。また、大陸から渡来した人々の人口流入の寄与も大きかった。人口は、十世紀ごろで七百万人程度であった。

第三の波の文明システムを経済社会化システムと呼ぶ。江戸時代に繋がる人口成長は、十四・十五世紀に始まったと推定され、人口は一八二三年時点で三二五八万人となっている。この時代の成長を支えた原動力が経済社会化すなわち市場経済の展開に求めることが出来る。

第四の波は、工業化システムへの文明転換に伴うものであった。他の時代でもそうであったように、人口は規模を増加させただけでない。年齢構造、職業構成、人口動態、地理的分布、所帯や家族の規模と構造な都の様々な側面において、前工業化期の人口学的特質とは異質な特徴を示している。しかし、近代人口成長がいつまでも続かないことはいよいよ現実のものとなってきている。

図1 日本人口の趨勢：縄文早期～2100年



現在の日本の人口は、二〇〇八年一億二千八百万人をピークにして、現在かなりの速度で縮小しつつある。主な理由は、少子化と海外移住である。現時点の予測によると、二〇五六年には、一億人を下回るといわれている。

成熟化した文明システムにおいてのとるべき道は、少子化の受け入れと静止人口の実現である。そのためには、人口の再配置、多様な社会構成員の共存を認める寛容性、長寿社会への制度的対応意識改革、家族構成の新しい形態への模索等である。